

また岩坂泰信さんもこの4月から空電研に移られました。水圏研のエアロゾル研究もなんとなく寂しくなってきました。しばしば名前のでくる大和政彦さんもこの春めでたく「理学博士」になることができました。彼こそ

は小野先生のこの10年間の研究を体現した存在であり、小野先生の立派な後継者になるよう頑張ってもらいたいと切に祈っております。小野先生、今年も春がめぐってきました。

会員の広場

長期予報発展のために（根本順吉）を読んで

青木 孝*

「天気」の1989年2月号の「会員の広場」に、1988年の暖候期予報が大きく外れたことに関連して、どのような予報資料が原因となって見込み違いが生じたかを示してもらいたいという、根本順吉会員による「長期予報発展のために」が掲載されました。長期予報課で予報を担当している一会員としては、このことについて次のように考えております。

数日先までの天気を予報する短期予報では、予報の対象としている現象についての気象学的な理解が進んでおり、根本会員が指摘したとおり、イギリスにおける低気圧の予報についてのアフターキャストのように、アフターキャストが予報技術の改善に役立てられている場合が少なくありません。長期予報においてもアフターキャストは必要なことですが、短期予報と同じように扱えないところがあります。長期予報の場合には短期予報に比べると、予報の対象とする時間スケールの現象についての物理的基礎がまだ十分に解明されていません。現在の長期予報は主に過去のデータに基づく確率論的な手法を用いているため、予報作業における判断の適否についても決定論的な評価は困難です。

私どもも1988年の夏や1988/89年の冬の天候について、ケーススタディを行うことしております。その成果に

* Takashi Aoki, 気象庁予報部長期予報課。

については日本気象学会の講演会や学会誌などで発表し、会員の方々と意見を交換することによって、現象の理解をさらに深めていきたいと考えています。このような成果の積み重ねが、長期予報技術の向上につながると思います。

現在、私どもは長期予報に関する気候系の診断的解析や数値予報の長期予報への利用あるいは文部省の統計数理研究所との共同研究で予報技術の客観化と予報の定量的な表現などのための技術開発を進めております。こうした長期予報に関する技術開発の動向について、日本気象学会への紹介や報告がこれまで十分でなかったように思われますが、詳しくは機会を改めて議論していただきたいと思います。

なお、現在の暖候期予報や寒候期予報に使われている各種の資料や、予報に対する考え方などについては、気象庁予報部発行の「暖候期予報資料」や「寒候期予報資料」、日本気象協会発行の「気象」に印刷されており、いずれも気象庁の図書館で閲覧できます。

また、WCRPの計画の中では、1~2か月先までの長期予報の物理的基礎を明らかにすることも課題として取り上げられており、研究が進められています。この分野に対する多くの研究者の参加と積極的な議論の発展を期待しています。